

日本医師会

Mass Gathering Medicine

に関する研修会

期 日 平成25年10月26日(土)

会 場 日本医師会館大講堂

日本医師会 Mass Gathering Medicine に関する研修会

目 次

開催要領・・・ 1

プログラム・・ 2

講師抄録

”Preparing for mass casualty: lessons from Boston”・・・・・・・・・・・・・・ 3

Paul Gregg Greenough, MD,MPH

Harvard Humanitarian Initiative, Brigham & Women’s Hospital

「南海トラフ巨大地震への備え」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

川崎 朗 陸将補

(陸上自衛隊九州補給処処長 (兼 目達原駐屯地司令))

「わが国のこれまでの Mass Gathering への医療対応から学ぶ」・・・・・・・・ 5

坂本 哲也 帝京大学医学部主任教授

(日本医師会「救急災害医療対策委員会」委員)

「あらゆる危機・災害に対応する米国から学ぶ」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

永田 高志

九州大学大学院医学研究院先端医療医学部門災害・救急医学分野

(日本医師会「救急災害医療対策委員会」委員、「国際保健検討委員会」委員、

日医総研客員研究員)

指定発言：福知山花火大会での火災における救急搬送対応について・・・ 7

日野原友佳子 (消防庁救急企画室救急専門官)

日本医師会

Mass Gathering Medicineに関する研修会

開催要領

I. 趣 旨

2020年（平成32年）の東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定し、多数の観客が集合、密集する中での事故やテロ等の災害への対策（Mass Gathering Medicine）が重要性を増している。

そのため、平成23年度に開催した「JMATに関する災害医療研修会」に続き、米国の災害医療専門家を招いてテロ対策等集団災害を中心とした研修会を行うことによって、全国の医師会における災害医療体制の充実、災害対応能力の向上に資することを目的とする。

また、各医師会で行われる災害医療研修会におけるモデルケースとなることを併せて目指す。

なお、本研修会は、都道府県医師会災害医療担当理事連絡協議会及び同国際保健担当理事連絡協議会を兼ねて開催する。

II. 日 時 平成25年10月26日（土）13時～15時30分

III. 場 所 日本医師会館大講堂

IV. 参加者

各都道府県医師会救急災害医療担当理事、国際保健担当理事
救急災害医療対策委員会委員、国際保健検討委員会委員
救急災害医療関係者

V. プログラム 別紙の通り

日本医師会 Mass Gathering Medicineに関する研修会 プログラム

日時：平成25年10月26日（土）

13:00～15:30

場所：日本医師会館大講堂

司会：石井 正三（日本医師会常任理事）

1. 開会

2. 挨拶

横倉 義武（日本医師会長）

3. Preparing for mass casualty: lessons from Boston

Paul Gregg Greenough, MD, MPH

Harvard Humanitarian Initiative, Brigham & Women's Hospital

4. 日本におけるMass Gathering Medicine 対策

「南海トラフ巨大地震への備え」

・川崎 朗 陸将補（陸上自衛隊九州補給処処長（兼 目達原駐屯地司令））

「わが国のこれまでのMass Gatheringへの医療対応から学ぶ」

・坂本 哲也 帝京大学医学部主任教授

「あらゆる危機・災害に対応する米国から学ぶ」

・永田 高志 九州大学大学院医学研究院先端医療医学部門災害・救急医学分野

指定発言：福知山花火大会での火災における救急搬送対応について

・日野原友佳子 消防庁救急企画室救急専門官

5. パネルディスカッション

座長：石井 正三（日本医師会常任理事）

・Paul Gregg Greenough, MD, MPH

・川崎 朗 陸将補

・坂本 哲也 帝京大学医学部主任教授

・永田 高志 九州大学大学院助教

・日野原 友佳子 消防庁救急企画室救急専門官

6. 総括

7. 閉会

Preparing for mass casualty: lessons from Boston

Paul Gregg Greenough, MD,MPH

Harvard Humanitarian Initiative, Brigham & Women's Hospital

南海トラフ巨大地震への備え

川崎 朗

陸上自衛隊陸将補 九州補給処長（目達原駐屯地司令）

1 自衛隊南海トラフ巨大地震対処計画(研究案)の紹介

○被害想定

- ・中央防災会議が取りまとめた被害想定から最大被害を引用

○対処態勢

- ・防衛警備上不可欠な部隊を除き、最大勢力を集中
- ・様々な発生形態に柔軟に対応できる前進目標と配属先の設定

○組織

- ・統合任務部隊を組織
- ・陸自部隊の組織・編成と対処態勢
- ・海自部隊の態勢
- ・空自部隊の態勢

2 過去の災害派遣における共通的な課題

○その1－緊急時の縦割り行政の克服

- ・災害対策本部内の活動の調和
- ・防災機関相互の連携

○その2－以下のことへの理解不足

- ・ Σ 各機関が収集した情報 \leq 必要とする情報
- ・防災機関の投入可能隊力 \leq 必要とする隊力

○その3－情報処理が標準化されていない

○その4－災害対策本部内の活動の調和

3 避難所の質の向上のために

4 災害時の支援のありかた

○公平性か迅速性か

5 まとめ

わが国のこれまでの Mass Gathering への医療対応から学ぶ

坂本 哲也

帝京大学医学部主任教授

(日本医師会「救急災害医療対策委員会」委員)

あらゆる危機・災害に対応する米国から学ぶ

永田 高志

九州大学大学院医学研究院先端医療医学部門災害・救急医学分野

(日本医師会「救急災害医療対策委員会」委員、同「国際保健検討委員会」委員、
日医総研客員研究員)

欧米では危機・災害対応、いわゆる危機管理は Emergency Management エマージェンシーマネジメントと呼ばれ、あらゆる危険 (All Hazard オールハザード) に対して確立されたマネジメントを用いて対応することを意味する。この Emergency Management の基本原則の一つとして Incident Command System(ICS)インシデントコマンドシステムが位置づけられ、関係機関が調整しながら危機・災害対応するための手法である。ICS の本質は、危機・災害に対して事前の計画において十分な分析を行い、関係機関の役割分担を明確に位置づけ十分な訓練を行い、有事の際に対応することである。一見すると当たり前のことであるが、東日本大震災から 2 年が過ぎた日本において、この当たり前のことが実現できたか、もう一度振り返らなければならない。本研修会では 2012 年に発生したハリケーンサンディ、そして 2013 年のボストンマラソン爆弾テロにおける米国の対応を紹介し、2020 年に東京オリンピックを控える日本において危機・災害対応のあり方を考えてい。

参考文献

Hurricane Sandy FEMA After-Action Report.Federal Emergency Management Agency

<https://www.llis.dhs.gov/sites/default/files/Sandy%20FEMA%20AAR.pdf>

Lessons Learned from the Boston Marathon Bombings: Preparing and Responding to the Attack. Committee on Homeland Security and Governmental Affairs.

福知山花火大会での火災における救急搬送対応について

日野原 友佳子

総務省消防庁救急企画室救急専門官

今年8月15日、京都府福知山市で行われた花火大会において、河川敷の観客席近くに設置されていた屋台から火災が発生した。当日は、例年通り11万人程度の観客が集まっており、火災は119番通報覚知後11分で鎮火したものの、負傷者は59人にのぼった。

福知山市消防本部から聞き取りを行った概要について、Mass gathering の場において適切かつ迅速な搬送およびトリアージが行われた例として概要を紹介する。

【当日の警備体制】

例年実施されている当該花火大会に対して、福知山市消防本部では従前から、集団救急・火災・水難事故等を想定した消防警備計画を策定していた。当日はその計画に基づき、消防署内および現地での警備拠点で警備体制を整えていた。また、集団救急事案に備え、市役所に大型バス2台の待機も行っていた。

【火災発生後の流れ】

19時29分 火災覚知

19時33分 消火準備開始、トリアージポスト設置等を実施

19時35～40分

－消火活動開始

－集団事案であるとの判断のもと、大型バス出動

19時35～50分

－医療機関におけるトリアージ実施を決定

消防警備計画内には定められていなかったが、現場状況を鑑み、現場の指揮本部長と署内の指令本部長で決定。福知山市民病院に残りの傷病者全員の一時受入を打診し、了承を得た。

－京都府に集団救急事案として報告、京都府からDMAT派遣要請

20時35分 初期搬送終了

－負傷者の状況（計59名、8月17日現在）

■福知山市民病院 45名

⇒ 軽症23名、中等症6名、重症16名（※重症のうち、12歳以下6名）

■京都ルネス病院 4名

⇒ 中等症 4名

■綾部市立病院 10名

⇒ 軽症3名、中等症4名、重症3名（※重症のうち、12歳以下1名）

その後、福知山市民病院に集まったDMAT医師により転院先の選定が行われ、40名中21名（中等症6名、重症15名）が近隣の9医療機関に転送された。

